

言語とコミュニケーション

濱中 信真

はじめに

ドイツでの生活において、出国前に私が一番不安にしていたのは「コミュニケーションをしっかりとることができるかどうか」であった。私自身、多くの留学経験もあって英語でのコミュニケーションに関しては不自由なく行えるようになったのだが、今回は英語圏外の国ということで、言語に関しての不安を抱えながらの出国となった。結果として、多くの人々とコミュニケーションをとることができ、良い滞在時間を過ごすことができたのだが、その際に「将来的に英語教師を目指す自分」としては色々と考えさせられることがあったため、今回はそのことについて報告したいと思う。

ドイツ人の英語力

まず驚きを隠せなかったのがドイツ人の英語力に関してのことである。とにかく流暢で、発音も大きな癖があるわけでもなく、いわゆるネイティブスピーカーに近い話し方をする人々が多く存在した。しかも聞いてみれば一度も英語圏に留学経験がないという人々ばかりであった。その要因について、現地の人へのインタビューをしたことを含め、私なりに3つの要因があると考えた。

まず一つ目は「ドイツ語と英語の近さ」に要因があると言えるだろう。私自身ドイツ語に関しては全くの無知であり、知っている言語は「ダンケシェーン（ありがとう）」くらいしかなかったため現地で初めてドイ

ツ語を学ぶこととなった。その際にドイツ語と英語にはかなり似た単語が多く存在するのに驚いた。例えばだが英語でいう「and(アンド)」はドイツ語で「und(ウント)」といったり、「can(キャン)」は「Kann(カン)」と言ったりとかなり近い単語が存在するのだ。全く理解できないドイツ語のコンバセーションの中でも時たまに理解できる単語があったりして、とても興味深く感じていた。この理由としては「言語とは起源となる数少ない言語から派生し増えていったものである」と言われており、ドイツ語と英語は突き詰めれば同じ起源の言語より派生されたものらしい。下の画像が言語の起源を分けた言語マップであり同じ色が近しい種類の言語であることを表している。



これによれば、ヨーロッパのほとんどの国が似たような言語を使っており、日本とは言語体系が大きく異なっている。このことがドイツの人々およびヨーロッパの人々が英語を流暢に話せる要因の一つだと私は考える。

2つ目に私がドイツの人々になぜそこまで英語が話せるか聞いたところ「近くにイギリスがあることや、他言語を使う人々が近くにいることが要因の一つ」という興味

深い意見が返ってきた。島国である日本と異なり、ドイツは多くの他言語国家に囲まれている。そのため異文化交流が盛んであり「他言語を話す必要性」があるため、人々は英語を話すことができるという意見であった。

3 つ目にはやはり「英語教育」の違いがあると思う。今回青年使節団のプログラムで学校を訪れた際は英語の授業に立ち会うことは叶わなかったが、実際にドイツ人に聞いたところやはり「話す」「聞く」という部分に多くの重点をおいて英語を学ぶということ聞いた。日本といえば「読み」「書き」に重点を置く教育が主とされているが、これに関しては日本の大学試験システムに要因はあると考えていたが、どうやらドイツでも「アビトゥア」と呼ばれる大学入学資格試験において「リスニング」及び「リーディング」「ライティング」の試験があるらしく、試験システムに関しては抽象的に見れば似たシステムであると言える。その中で「話す」「聞く」において重点的に教育をしているのは先ほど述べた「英語を話す必要性」にあるのではないかと考えた。近くに他言語を使う国が昔から存在していたことが「コミュニケーション英語」を学ぶ要因の一つではないだろうか。

これらが私が考える「ドイツ人が比較的英語を流暢に話す要因」である。この中でもやはり「英語教育の違い」というものが一番大きい要因であると考えます。現在情報機器や交通機関の発達により「グローバル化」が急速に進んでいる。日本でも近年外国人観光客の増加や、海外での仕事の増加、さらには東京オリンピックの存在によりさらに多くの外国人、他言語を話す人々が訪

れると予想されている。今後は「英語を話す必要性」がかなり高まる為、英語教育についての見直しがさらに図られるのではないかと期待しており、英語教師としてそれに貢献したいという気持ちがこの青年使節団のプログラムを通じて一層強くなった。

言語とコミュニケーション

このようにドイツ人の人々の英語力の高さを感じたが、あくまでそれは「若者に限った」話であり、年配の方々の英語力に関しては日本人と変わらない印象を受けた。近くに英語圏の国があるとは言え、やはり昔は今ほど英語の必要性が強くなかったのであろう。

今回のホストファミリーは英語がほんの少しだけ話せるホストマザーと英語がほとんど話せないホストファザーがいた。今まで何度かホストファミリーにお世話になったことがあるが、その全てが英語圏の人々であったため、こういう経験は初めてだった。初日は正直言って殆ど話すことができなかったが、日を追うごとに少しずつ会話ができるようになってきた。相手の知っている英語をできるだけ使用するように試み、お互いの意思疎通が取れてきたからであらう。至極当たり前の話であるがコミュニケーションに言語は欠かせないと感じた。正直言って、言語なしでもコミュニケーションを取ることは可能であった。現にホストファザーともボディランゲージを混ぜながら意思疎通を図ることができた。しかしそれはあくまで短期的で「飲む、食べる」のような浅いコミュニケーションでしか通用せず、お互いを本当に理解するための深いコミュニケーションや長期的なコミュニケ

ーションをするためには言語は必要不可欠なものであると感じた。

とはいうものの他言語におけるコミュニケーションの入り口は「伝えたいという意味」だと実感した。何も伝わらなかった初日と少しずつコミュニケーションが伝わるようになった二日目以降の違いはまさにそこにあったと思う。初日は「言葉が伝わらないこと」に対し憤りを感じるだけで伝えようという意思に欠けていたと考える。二日目以降は「なんとかコミュニケーションを取りたい」「もっと仲良くなりたい」という思いから「伝えようとする意志」が強くなったため、コミュニケーションが円滑になったのだと思う。英語を話せるようになってから疎かになっていた「伝えようとする意志を持つこと」の重要性が言語が通じないドイツに来て再確認できたことは非常に良いことであったと思う。

しかしあくまでその気持ちは「コミュニケーションの入り口」であり、必要不可欠なものであるとは言え、その気持ちだけになったらいけないと考える。その先の深いコミュニケーションへと続くにはやはり言語を習得することは避けられないであろう。言語を学べば学ぶほどより深くコミュニケーションをとれるようになる、それこそが言語を学ぶ上で知っておくべきことでモチベーションとなる部分なのであろう。

今回のホストファミリーとの出会い、生活、もちろん楽しく、素晴らしいものであったが、それと同時に多くの学びを得られたとても素晴らしい時間であった。



通訳という仕事

言語に関して「通訳」という仕事にも感じさせられることがあった。今回の旅に欠かせない存在であったのが「通訳」の存在である。まず私たちが訪れた場所の全てでそこに存在する意味、歴史、人々の思いを知ることができたのは通訳さんの言葉がatteのものである。その場の雰囲気を感じながら、日本語で歴史を知ることができたこと、現地の人々の話をそのままリアルタイムで日本語で聞くことができたことは通訳さんの存在がatteこそのものである。

またその他にも実際に私自身の言葉を通訳してもらう機会もあった。送別会にて私たちは福笑いと私たちが作成した尼崎市のプロモーションビデオを披露した。まずプロモーションビデオの音声の翻訳を尼崎市役所の方に全てしてもらった。また私自身司会役としてその場に臨んだが、その際にも通訳さんに大きく助けられた。結果としてビデオも福笑いも、司会も十分に楽しんでもらえたようで、結果は成功であったのではないと思う。その成功を支えてくれたのが通訳さんの存在である。ビデオの翻訳をしていただいた市役所の方はもちろん、司会の際の通訳さんも、私が伝えたい文章

をただ機械的に通訳するだけでなく、しっかりと私の声の抑揚、タイミングなどもしっかり通訳していただき、お陰で場を盛り上げることができた。今後通訳という仕事について、IT化の影響で厳しくなる仕事、奪われる仕事であるという風に聞いていたが、大きく考え方が変わった。ただそっくり文章を他言語に翻訳するのは今後、機械やロボットがする仕事になるだろう。しかし、本当に伝えたいことを自分らしく伝えるためには、翻訳の手段としてやはり同じ血の通った人間がするべきだと思う。互いの文化、人の伝えたいことを理解した上で、100%に近い形で他言語に変換することは今後も人間にしかできないことであろう。この経験で通訳さんの仕事の奥深さを少し知れたと思う。

ることが多かった。今後急速なグローバル化により、世界各国とコミュニケーションを取る機会は増えていくであろう。その際に「言語」は多くの人々にとって大きな壁となっていくだろう。そしてその際に通訳という仕事はかなり重宝されていくものとなっていくだろう。しかし、私たち自身もより多くの言語をより高いレベルで扱えるようになっておけば、より円滑により深いコミュニケーションをとることができるであろう。その為にも、基礎となる子供達への教育というものはかなり重要なものになってくる。現在どの言語も「うまく使うことができない」と考えられている日本人のイメージを覆すためにも、今回の体験も大切にしながら、少しでも教育に対して貢献できるようにしていきたい。



まとめ

今回のこの青年使節団のプログラムを通じて多くのことを学ばさせていただいた。その中でもやはり私にとって「言語」というものは印象に残ったものであり、一番考え